

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第四十六卷 「社会科学（二の六）」

個人・自然人と国家内思想的結束人間集団・共同体（営利企業・会社、  
宗教団体、思想団体、政党、政治団体、暴力団、人権団体、女性団体、  
LGBT団体、人工言語共同体）

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第四十六巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、個人・自然人と国家内思想的結束人間集団・共同体（宗教団体、思想団体、政党、政治団体、暴力団、人権団体、女性団体、LGBT団体、人工言語共同体）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

女性による女性疎外 Ⅱ 江戸時代の日本女性の性観念と、当サ

イトに来て下さる女性の性観念の比較Ⅱ

女性による女性疎外（2）

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

女性による女性疎外 II 江戸時代の日本女性の性観念と、当サイトに  
来て下さる女性の性観念の比較 II

二〇一〇年七月十一日 起筆、攔筆、公開

鬱や対人恐怖症や強迫性障害にかかったことがきっかけでお話をさせていたでいる女性の中には、女子大の学生さんたちがいらっしやることもあり、そこから今の若い女性の性観念を調べさせてもらう機会が増えた。僕がまだ二十八歳であり、在野で、しかも個人でこういう話題に取り組んでいるために、自分の大学の男性教官を相手に被験者になるよりも、僕を相手にするほうが話しやすいというのも契機ではあったけれども。

このサイトの常連でお会いしている女性に、それぞれ、大妻女子大、昭和女子大、共立女子大、東京家政大、十文字学園女子大などの学生さんがいらっしやるため、ご自身のことを伺ったり、ご友人に聞いてもらったりして、僕を基点に、ちょっとしたネットワークができた状態にはあると言える。

そこで一つ気づいたことは、今現在、鬱や対人恐怖や強迫性障害に

かかっている若い日本女性には、かなり高い割合で、「周りの女性との性観念の違いによる焦燥感・圧迫感・絶望感」が見られることだった。あるいは、ただ単純計算しただけでも、婚前の性交渉を拒否する性観念か、愛する男性以外には体を明け渡さないという性観念を持つている割合は、鬱や対人恐怖や強迫性障害の女性では極めて高い。おそらく、性的な悩み自体が、鬱や対人恐怖や強迫性障害や解離性障害の主たる要因になっている女性が、表に出ない形で確実にいる。逆に言うと、これらの症状の原因として、明らかに「現代一般の日本女性の無言または有言の圧力による、一部の日本女性が感じる性的疎外感」があると思う。

驚いたのが、意外にも今の日本には、「私は婚前の性交渉を控えている」、「本当に好きな人が現れるまでは処女を失うつもりはないです」という若い女性が「極めて低い割合だが、しかし確実に一定の割合は」いるということであった。

そもそも、僕のところには、「三十代を過ぎても信念から処女を保っています」という女性、そしてその気持ちがある一方で、「自分は周りの女性から遅れていると感じるし、実際にそう言われる。悲しいので何とかしたい。ここまで来ると、性欲に欠陥があると思われるのが怖い。どちらかというと、性欲は強いです」という女性からの相談が多い。

もつとも、この女性たちは、自分だけが周りから浮いていると感じており、言葉にならない焦燥感と不安感とを覚えているのが伝わってくる。今のうちに、行き場を無くしたこういう多くの女性の相談に乗ればと思っている。

ところで、こういう女性の方々と私とのつながりについて、一つの「一夫多妻的な男女関係」ではないかと言われたことがある。一見すると、ある意味ではそう映るのかもしれない。無論、それが誤解であることは言うまでもない。そもそも、私は未婚者である。

さて、ここで一つの疑問が生じる。江戸時代、あるいは昭和前期までの日本では、処女崇拜があまりなく、婚前交渉に寛容で、春画も描かれ、多くの日本女性が張形（男性器を模したおもちゃ）でおばあさんやお母さんから積極的に自慰行為の手ほどきを受け、自分たちもそれを楽しんでいたという史実との関連である。

当時の張形での遊びは、今のようにならぬに男が優位に立つて「攻撃的」にするものではなく、女性が結婚前に一人で楽しんだり、女性どうしで見せ合いつこするものでさえあった。

ところが、私のところに来て下さる、いわゆる「周りの女性から、古風だとか日本的だとか世間から遅れているとか言われている」女性ほど、今では婚前交渉消極派に回っていることに気づく。どちら

かというところ、今の時代、性に奔放なのは、「古風で日本的な女性」ではなく、街行くギャルのほうだったり、援助交際を繰り返す女性のほうだったりするわけだ。

これは果たして矛盾かと言うと、僕はそうは思わない。昔の日本女性の性質を受け継いでいるのが、今の多くの女子大生やギャルのほうだとは思わない。なるべく後々まで処女を保っている一部の鬱な女性たちのほうだと思う。

実は、「江戸時代の日本女性の性交渉の奔放さ」と「今のごく一部の日本女性の、派手ではない、清楚な雰囲気のある固い性観念」とは、同じコインの裏表なのではないだろうか。そもそも、そこまで自ら処女を守ろうとするような控えめな女性が、そのことを僕に悩みとして相談して告白してきていること自体が、実は「日本的な女性である証拠」であるのだから、安心したらいいですよ、と僕は答えることにしている。

先の女子大生たちや80年代女性たちに、「あなたは昔の日本女性の性の奔放さと、あなたをからかってきた今どきの女性のそれとは、何が違うと思いますか？」と聞くと、「はい、何が違うと思うのです。逆に、もし私が昔の日本に生まれていたら、なぜか処女観念にこだわらなかつた気がします」と答える。ここには、次の二つのカギが隠れていると思う。

●実は、江戸時代の日本女性だって、本当に大好きな男性と性交渉していた。（確かに婚前交渉する女性は、今よりも江戸時代のほうが多かったが、むしろ、恋愛と生殖と性欲が一致している割合も、江戸時代のほうが高かったということ。女性の性欲は、ただの奔放な性欲ではなく、恋愛・生殖と密接に結び付いた性欲であったからこそ、性交渉が盛んだったのであり、それが今の我々の目に「奔放すぎる」と映っているだけのこと。）

●今の日本には、「結婚の前か後かさえどうでもよくなるほど、すぐにでも抱かれないと本気で女性に思わせる男性」が少なくなったということ。だから、一部の女性のガードが固くなったのだということ。そのガードの固さは、極めて「日本的な観念」であって、「潔癖症の女性の偏狭で堅苦しい観念」ではないこと。

今の一部の十代〜三十代女性に見られる「本当に好きな男性が現れるまでは処女をとっておく」という信念は、おそらく、「昔の日本女性の性の奔放さ」と矛盾するものではない。それは、決して、処女崇拜や一夫一婦制を標榜するキリスト教の影響によって日本女性が身に付けたものでもないと思う。むしろ、それらとは無関係に、「今の一部の女性が、現代社会の中で身を守るために自然に自発的に身に付けた、本当は極めて日本的な性観念」だと僕は考える。

そうであるからこそ、今の日本で、「私はまだ体を大切にしています」という女性に対して、周りの女性が「時代に乗り遅れている」とけなしたり、男性が「めんどくさい女だな」などと攻撃することは、間違っているというのが僕の考えだ。

時々、歴史学者や教育学者などで、「日本女性は昔から性に奔放だった。だから、今の日本女性で、好きな人が現れるまで処女を保っておきたいという潔癖的な考えを持っている人は、極めて近現代的な偏った考え方で、史実に照らしても日本女性らしいとは言えない」というニュアンスの発言をする人がいるが、僕はそうは思わない。

例えば、歴史学者の網野善彦氏も、「かつて日本女性には処女観念がなかった」とし、「日本女性は処女性を少しも重んじないとフロイスが書いたのは、不正確とは言えない」との立場をとっているが、史実としてはともかく、網野氏の中に僕が今書いてきたような「通時の変化」についての視点、つまり「処女性を重んじなかった昔タイプの女性の流れをくむのは、現代では処女性を重んじるタイプの女性である」という視点があつたかどうかは疑問だ。

以上のことは、僕の性的能力に照らせばわかりやすいと思う。僕は、街行く女性の方々の排卵が感知できるし、ある程度時間をかければおよそ40%くらいの女性の排卵は感知できるのだから、もし僕が

江戸時代に生まれていたら、近所や隣町の娘さんのうち40%の娘さんに対して、望まない妊娠をさせずに「夜這い」を仕掛けることができたことになる。

江戸時代の「夜這い」は、男性が勝手にやるものではなく、目上・年上のおばあさんやお母さんが、娘たちに受けさせるものでもあったし、娘たちもそれを楽しんでた。それを僕が今女性に対してやっていないのは、「現代日本社会」に生きているという自覚があるからであり、「重婚の禁止規定」や「倫理観」があるから、というだけのことだと思う。

もちろん、そういう動物的な排卵察知能力を今でも有しながら法と倫理を徹底して守る生き方が一番すばらしいと思うけれども、そういう能力がないのに法と倫理を犯してしまっている男性のほうが残念ながら多い、ということはあると思う。なるべく昔の日本の良さを大切にしながら、現代日本らしい性観念を持って生きていくものだと思う。

その点で僕は、今の女子大生の中に「好きな人が現れるまでは処女でいます」という女性がいるのは、いいことだと思うし、褒めてあげるようにしている。

ひとまずは、「昔の日本女性の性の奔放さの正しい意味を先験的に理

解している今の一部の日本女性は、むしろ婚前交渉慎重派に回っている現状がある。だから、そういう女性を今の日本社会からずれていると言って非難するなどということは、絶対にやってはならないことだ」ということになると思う。

そして、ここに来て再び、昨今の極めて偏向された歪んだ日本史ブームが、先の疎外された一部の女性たちをいっそう苦しめていることになる。

親友どうしであった女子大生たちが親友の性風俗業への就業を機に仲違いする例を、私は間近に見てきた。例えば、ある女子大生が、「どうして自分の水着姿（体、排泄物など）を売ってお金儲けするの？」と友達に聞いてみたところで、「だって、昔はみんなハダカだったじゃん。江戸時代までは、女だって胸丸出しで歩いてたのよ。畑にウソも撒いてたのよ。あんたの考えのほうに固い考えなんだよ」で終わってしまった。実際に私の目の前で、親友に向かってこう答えた女子大生がいるのである。

こういう返答の仕方をする女性というのは、おそらく、先の「疎外された女性」が一昔前の日本の光景（例えば、外でも平気で乳房を出して子どもに乳をあげて、他の男性もそれをほほえましく見ていた光景）のほうはいやらしいと見なさない女性であることを、知らない。

そういう「疑似江戸趣味」の、性に奔放な女性たちの言い分とは、「原始的な裸族や一昔前の日本女性の性のあり方」と「水着姿や体を売る自分たちの性のあり方」とを同じものだとする前提によって成り立っている。そのこと自体が、「その問題点に潜在的に無意識的に気づいていながら自分では上手に反論できないごく一部の女性たち」を疎外している。

今や電車の吊り広告を見ても、女性アイドルや女優の水着姿はごく普通にプリントされているけれども、それを見て吐き気がしたり、パニック発作を起こしたりしている女性がいることを、おそらくは多くの男性も知らなければ、多くの女性も知らない。

けれども、例えば、強迫性障害の女性にとって、「いつも化粧品をまっすぐに並べないと、なんだか気持ち悪い」「今日は悪いことが起きる気がする」「玄間のカギ閉めたかな……」などという強迫観念と、「私の友人はどうして知らない男性に水着姿や裸を提供したんだろう」という「わからなさ」は、同じ次元の苦悩であるように、少なくとも僕には感じられる。

男性にとって「いい女」の定義はそれぞれだろうし、水着や裸になつてくれる女が「いい女」だというのが、いわゆる「一般の」「普通の」「今の」男性の発想だろうとは思うけれども、少なくとも僕個人

としては、鬱や対人恐怖症や強迫性障害の女性は「いい女」だなどと思う。もう少しそういうことを言つてあげてもいいのではないかと僕は思う。

### 女性による女性疎外（2）

二〇一〇年七月十六日 起筆、摺筆、公開

僕は、文字や音などに色が見える共感覚や、女性の排卵や月経を遠くから感知できる共感覚を告白し、大学の研究者にまで自分の体験を語ったり体験記録を持参するようになって、特に後者の共感覚に関連して、逆にそこで出会った女子学生さんたちやDV被害女性との交流をはじめ、十代・二十代女性の性の悩みに触れ、勉強させていたたく機会が増えた。

そして、性的トラウマ・性的被害によって重度の解離性障害や対人恐怖症を引き起こした女性のご意見に触れる機会も増えた。

知能が「女兒退行」を引き起こした女性もいるため、普通に言葉のやり取りをすることさえ難しいこともあるが、僕としては、その恋愛観・結婚観を、差し支えない程度に聞かせてもらってきた。

性的な問題を抱えた女性たちの中には、「将来一緒になれるたった一人の理想の男性」を誰よりも求めていると言うにもかかわらず、「結婚」という概念を嫌ったり怖がったりする女性たちが、一定の

割合いる。僕が話を聞いてみるに、あまり分類するのはどうかと思うが、次の三点のいずれか、または全てが、彼女たちの心にある気がする。

●結婚が「長期売春契約」であることへの恐怖

●結婚が「国家・公的機関への性行為相手の登録」であることへの反発

●結婚が「女としての恥じらいの放棄になる可能性」への不安

僕が感じたことは、彼女たちはマルクス主義さえ超えた「日本女性特有の穏やかなアナーキスト（無政府主義者）」だということだった。順番に、この女性たちの主張をまとめて文章にしてみた。

●結婚が「長期売春契約」であることへの恐怖

「男性と結婚することは、その男性と長期に渡る売買春の契約を結ぶことであり、私は体売りたいわけではないから、結婚という決まりはいらない。性に奔放な周りの女性とうまく折り合っていないようなこんな私が大好きになる男性も、きつと私を買いたいのではなく、本能的に守りたいと思う男性のはずだ。頑張っただけでくれている男性に夜に自分の体を提供するという当たり前のことが、紙切れがないとできない女性のために、結婚はあるんだと思う。だ

から、実は私がなりたいのは、“愛する一人の男性にとって最高の娼婦”なのであり、“最高の娼婦”になりたい女は、結婚という長期売春契約を拒否するはずだ」

▲結婚が契約であることは言うまでもないが、さらに結婚を一種の売春と見なす考え方は、結婚制度を使わずに「真の娼婦」になるべきが女だという考え方は、何もこの女性たちだけの「異様な結婚観」ではなく、ニーチェ・キルケゴール・デリダなど過去の哲学者にも見られる。

むしろ、この女性たちの「結婚回避」は、「私は結婚しなくても、たった一人の理想の内縁の夫だけに心身を捧げる」という固い決意と表裏一体で、彼女たちは「契約の紙切れの有無」が自分の気持ちに影響しないことを知っている。

●結婚が「国家・公的機関への性行為相手の登録」であることへの反発

「私が将来、誰かと結婚したら、その男性は国家や地方公共団体に、私の性行為相手として正式に把握されることになる。私だって、同じく把握される。自分たちが属する国家・公的機関の男性と女性たちに、私たちの性的関係の存在は把握される。それは結婚相手に迷惑ではないだろうか。私が愛する男性は、私がそんなことになるの



を喜ぶような人だろうか。きっと違う。私はそんな人は選びたくないし、そうはならないと思う。その男性と私とが本当に愛し合うには、結婚制度を回避して、内縁でなければならぬ。内縁であることによつてしか、私たちの愛は国家を超越することができない」

▲これは、女性たち自身は気づいていないだろうけれども、病院にかかれば妄想性の人格障害や統合失調症と判断される一歩手前の状態であり（僕は「あなたたちは正常な女性だ」とだけ言って、通院の勧めなど毛頭しない主義だが）、僕の考えでは、「国（くに）」というものが日本人にとつて「国家」ではなく「ムラ社会的共同体」であつた時代への回帰願望だと思ふ。

日本が近代的な「国家」ではなかつた時代には、自分たちの愛の上に立つ権力なんてものはなかつた。江戸期の幕藩体制でさえ、相對死の流行に脅かされた。今や、自分が愛する男性の仕事や生き方をコントロールする「主権国家」なんて超越概念があることが悔しくてたまらない。だから、自分が属する国家の「結婚制度」をあえて外れて「内縁」に徹することが真の愛だ、という考えになつてゐる。

また、僕が自分の持つ「女性の性周期を察知できる共感覚」と付き合うのに反面教師的に一通り見てきたマルクス主義界隈においては、今でも「女性の公有」というものが、盲点でありながらも議論されることがある。「女性公有化」の発想は、マルクス主義者たちの絶望から来ていると思うが、上記の女性たちは、マルクス主義をさ

え通り越した「優秀なアナキスト」であると僕は思う。「私が愛する理想の男性の上に立つ国家などあるはずもない」という彼女たちの「真剣な妄想」は、僕にとつては「正常な日本女性に特有の感性が一気に発散されたにすぎぬもの」に思える。

●結婚が「女としての恥じらいの放棄になる可能性」への反発

「私たち女性というものは、私は誰と性行為をしています、なんてことは公に語ってはいけません。そんなことは語らないという恥じらいがないといけません。結婚するということは、それを周りの知人や隣近所に、無言にして一気にしゃべると同じことになる。だから、私のように、自分が周りの女性以上に遠慮がちで、人付き合いが苦手、控えめな女性だと知っている女性は、結婚せずに大好きな一人の男性と性行為していきけるような人生を送つたほうが、自分の性格に合つていて、幸せかもしれない。今の日本女性の多くにとつて、結婚とは、一見すると収まりの良い言葉に聞こえるけれど、それまでに何人か付き合つて性行為してみた男性との関係を帳消しにするための言い訳がほんの少しでも入つていたのでしたら、私が結婚するということ、私にも過去に結婚相手以外との性行為体験があつたと勘違いされる要因にもなりかねない。だから、現代日本において真に家庭的な女は、結婚に向いていない」

▲これは何人かの解離性障害の女性に共通していた主張をまとめたものだが、これこそ、「一部の日本女性の疎外感」を端的に表していると思う。解離性障害の女性は、自らの運命を呪って同性攻撃に走るのではなく、むしろ周囲の同性に対する無批判を保ち、淡々と社会を分析した結果として心身に防衛態勢を張っている場合が実際はほとんどである。稀に、単一の自我による防御能力を大幅に超える社会的外圧・心的外傷を受けると、解離性同一性障害を引き起こす。先の「私の性格に合っていて、幸せかもしれない」「勘違いされる要因にもなりかねない」という言い回しにも、「攻撃性」よりは「人柄の良さ」が感じられる。

◆一つ気づいたことは、今現在、鬱や対人恐怖や強迫性障害にかかっている若い日本の女性には、「周りの女性との性観念の違いによる焦燥感・圧迫感・絶望感」を持っている女性も多いということだった。女性の社会進出が叫ばれる中、女性どうしの性観念格差もかなり広がっているようである。

周りの人たちにとっては他人事、ささいなことだと感じられることについても大変な深さで悩んでいる女性は、それなりにいるということだと思う。そして、その当初の悩み自体は、異性である男性から見ても大変に美しいものだと思えていたものが、あまりに悩みすぎると、自分だけが時代にそぐわない女性なのではないかという錯覚や妄想に陥り、なかなか気分が回復が難しいところまで行き着

いてしまうようである。

例えば、僕のところに来た質問で、「私の大学の親友が、バイトで水着になったり、少し脱いだりして、写真まで撮られてきました。それで私はめまいがして倒れそうになりました。世に自分の水着姿を売る、自分の裸を売る、というのが、今の女性の普通の感覚で、私のほうがおかしいのでしょうか？」というものがある。

もうこれだけで、この女性にとってみれば、自分以外の女性全員が親友のようなタイプの女性に見えてしまうのだと思う。ただし、親友のことが本当に好きだったからこそ生じた衝撃や悩みであることは、間違いないと思う。

それに、このような質問は、「本当の質問」でもあるだろうが、「私のほうがおかしくない女性だと言ってほしい」という願望から出た質問でもあると共に、「私は親友みたいな女性にはならない」という意思表示を誰かに同意してほしいという願望から出た質問でもあると思う。こういうことについて、かえって同性よりも異性に相談しやすいと感じる女性もいるようである。

この後、この女性が親友との関係をどうするかといったことは、どうしてもこの女性自身が頑張って考える以外にないと思うのだ。どこからどこまでを「普通一般の女性の常識・社会通念」と呼ぶかによっても違ってくるけれども、悩みの主たる要因が「性的なこと」である場合を今は考えたい。

女性による女性の性的疎外、つまり、「私ばかりが周りの女性から取り残されている。でも、やっぱり私は周りの女性の性観念につい

て行けない」という感覚を覚える女性について、僕は社会学的見地からも非常に関心を持つて見ている。「私ばかりが」という部分は確かに思い込みすぎかもしれないが、「取り残されている。ついて行けない」という感覚は、「取り残されたくない。ついて行きたい」という心境ではなく、「取り残され、ついて行けないと、女性として生きる意味がないのだろうか」という心境である限り、その女性個人の問題として終わらせるわけにはいかないからだ。

そして、こういう不安を抱える女性に話をよくよく聞いてみると、男性だけではなく、女性の友人や同僚からも、「あんたは彼氏もいないし、男性経験もなさそうだし、ホントにつまらない女だね」などといった言葉の暴力、セクハラ、パワハラを受けている女性が少なくない。

「男性が女性を解離性障害などの症状に陥らせる」のはいとも簡単で、性的暴力がその主たる方法に当たり、多発していることは確かだが、実は「女性が女性を精神疾患に陥らせる」陰湿ないじめ、セクハラ、パワハラなども進行しているというのも、また現実なのだと思う。

自分が原因で生じたのではない（同性からの威圧によって感じざるを得なくなった）性的な悩み自体が鬱や対人恐怖や強迫性障害や解離性障害の主たる要因になっている女性が、表に出ない形で確実にいるということを、しっかりと心に留めておきたいと思う。

このような神経症的な症状に陥っている女性に対してとるべき姿勢とは、「目の前の女性の症状を治して、“正常な”女性に戻してや

る」という姿勢ではなくて、「目の前の女性が鬱や対人恐怖症や強迫性障害であることは、それ自体が“人間的な人間”であることの一つの証であり、話は思いきり聞いてあげる」という姿勢ではないかと思う。

昨日は久々に東大に行つて、自分の感覚や自閉症観・精神病理観などについて話をしてきた。プレゼンではなく、先生との対談のよくな形になったが。途中、女性の体の状態（排卵、生理など）を察知することがある僕の共感覚の話から、エロティシズムとは何か、自己と他者とは何かについて、哲学的な議論になったのが面白かった。